

FUENTES DE INFORMACIONES
DE PRENSA

Hemos publicado en nuestros editoriales del 6 y 17 del corriente artículos titulados respectivamente: "Cuestión de las Agencias Noticias" y "Misión de la prensa", denunciando el tema de la preocupación de los pensadores.

Por pura casualidad o por algún motivo que ignoramos, "La Prensa" de Buenos Aires ha publicado un editorial el día 22 del corriente con el siguiente título: "La prensa y las fuentes de informaciones", manifestando así su preocupación sobre el mismo asunto.

Aplaudimos el propósito elevado que le anima para tratar asuntos de trascendencia como éste. En sus consideraciones admite que "para que una información pueda considerarse buena es indispensable que refleje la verdad; que la difusión de la verdad con carácter universal haría más remota la posibilidad de la guerra". Además inserta una cita del discurso del Presidente de la United Press, pronunciado recientemente en Cleveland, en el cual confiesa la triste verdad: "la intrusión del gobierno en el libre intercambio de noticias, requerida como medida temporal de guerra, tiene que desaparecer inmediatamente después de terminado el conflicto, si se quiere que continúe la libre difusión de las informaciones del mundo".

No obstante ello, "La Prensa" no expresa nada de su propio pensamiento sobre el particular. Si no sabía lo que pasaba en los Estados Unidos, ahora lo sabe. Sabe que las informaciones de U. P. no son informaciones verídicas ni libres. Por qué entonces, no reacciona "La Prensa", que manifiesta estar de acuerdo con los principios de la verdad expresados más arriba? Por qué sigue satisfecho con obtener y publicar las informaciones de un órgano de gobierno extranjero, cuando podría o debería obtener informaciones libres como le cuadraría al primer diario del continente?

Con sólo proclamar la aspiración de la libertad, si no tiene energía y valentía de proceder para imponer su voluntad, basada en la verdad y la justicia, no se logra la independencia real: con ayudar a propagar las informaciones interesadas no se cumple con la misión de la prensa.

【東京廿七日】海軍・事評論
家はよく述べてゐる
陸により太平洋戦局の中心
がソロモン群島方面よりギ
ルバート諸島方面に移つた
のである。

【東京廿七日】海軍・事評論
家の如きがあるが、それ
はソロモン群島方面において
敵のタラワ、マキン島上
空襲に引掛り三機を撃墜され惨敗として逃げ去つた。この戦闘において我方は飛行場に機銃掃射を試みたがこれまた我方の防空に因り損失を喫したが右戦闘において敵が最新鋭を誇るビーエーワーク型もまた到底わが陸軍の敵にあらざることが立證された、空中戦において我方一機破損されたが搭乗員は落下、傘降下により無事であった。

【東京廿七日】帝國陸軍航空部隊は二十五日朝蘭貢に飛来した米最新鋭機ビーエーワーク型より成る二十機の敵編隊が同地に来襲したが我が猛烈な地上砲火並に戰闘機の攻撃に遭ひ何等なすとこなく敗走した。同日午後三時四十分より三時十五分にかけ敵は復又戦闘機十機を邀撃、二十分間に亘つてこれと交戦その三機（内不確實一機）を撃墜したがこれまた我方の防空に因り三機を撃墜され惨敗として逃げ去つた。この戦闘において我方は飛行場に機銃掃射を試みたがこれまた我方の防空に因り損失を喫したが右戦闘において敵が最新鋭を誇るビーエーワーク型もまた到底わが陸軍の敵にあらざることが立證された、空中戦において我方一機破損されたが搭乗員は落下、傘降下により無事であった。

また同日午後一時から一時三十分にかけてビーエーワーク型より成る二十機の敵編隊が同地に来襲したが我が猛烈な地上砲火並に戰闘機十機を邀撃、二十分間に亘つてこれと交戦その三機（内不確實一機）を撃墜したがこれまた我方の防空に因り三機を撃墜され惨敗として逃げ去つた。この戦闘において我方は飛行場に機銃掃射を試みたがこれまた我方の防空に因り損失を喫したが右戦闘において敵が最新鋭を誇るビーエーワーク型もまた到底わが陸軍の敵にあらざることが立證された、空中戦において我方一機破損されたが搭乗員は落下、傘降下により無事であった。

【東京廿七日】帝國陸軍航空部隊は二十五日朝蘭貢に飛來した米最新鋭機ビーエーワーク型より成る二十機の敵編隊が同地に来襲したが我が猛烈な地上砲火並に戰闘機十機を邀撃、二十分間に亘つてこれと交戦その三機（内不確實一機）を撃墜したがこれまた我方の防空に因り三機を撃墜され惨敗として逃げ去つた。この戦闘において我方は飛行場に機銃掃射を試みたがこれまた我方の防空に因り損失を喫したが右戦闘において敵が最新鋭を誇るビーエーワーク型もまた到底わが陸軍の敵にあらざることが立證された、空中戦において我方一機破損されたが搭乗員は落下、傘降下により無事であった。

亞東然丁時報

CORREO ARGENTINO
FRANQUEO PAGADO
TARIFA REDUCIDA CONCESSION ZIB
發行所西蘭然丁時報社
アエノス・アイレス市
カスパリアタ橋九八一
電話(二三)七〇五一
通票料月額ニ疊五十仙
Director:
T. MIDZUNO
REDACCION:
Uspallata 981
U. T. 23, 7081

戰爭と海運

好來彌太郎

蘭貢上空に反復來襲敵機擊墜 陸軍の敵に非ず米の最新鋭機

【東京廿七日】帝國陸軍航空部隊は二十五日朝蘭貢に飛來した米最新鋭機ビーエーワーク型より成る二十機の敵編隊が同地に来襲したが我が猛烈な地上砲火並に戰闘機十機を邀撃、二十分間に亘つてこれと交戦その三機（内不確實一機）を撃墜したがこれまた我方の防空に因り三機を撃墜され惨敗として逃げ去つた。この戦闘において我方は飛行場に機銃掃射を試みたがこれまた我方の防空に因り損失を喫したが右戦闘において敵が最新鋭を誇るビーエーワーク型もまた到底わが陸軍の敵にあらざることが立證された、空中戦において我方一機破損されたが搭乗員は落下、傘降下により無事であった。

また同日午後一時から一時三十分にかけてビーエーワーク型より成る二十機の敵編隊が同地に来襲したが我が猛烈な地上砲火並に戰闘機十機を邀撃、二十分間に亘つてこれと交戦その三機（内不確實一機）を撃墜したがこれまた我方の防空に因り三機を撃墜され惨敗として逃げ去つた。この戦闘において我方は飛行場に機銃掃射を試みたがこれまた我方の防空に因り損失を喫したが右戦闘において敵が最新鋭を誇るビーエーワーク型もまた到底わが陸軍の敵にあらざることが立證された、空中戦において我方一機破損されたが搭乗員は落下、傘降下により無事であった。

【東京廿七日】帝國陸軍航空部隊は二十五日朝蘭貢に飛來した米最新鋭機ビーエーワーク型より成る二十機の敵編隊が同地に来襲したが我が猛烈な地上砲火並に戰闘機十機を邀撃、二十分間に亘つてこれと交戦その三機（内不確實一機）を撃墜したがこれまた我方の防空に因り三機を撃墜され惨敗として逃げ去つた。この戦闘において我方は飛行場に機銃掃射を試みたがこれまた我方の防空に因り損失を喫したが右戦闘において敵が最新鋭を誇るビーエーワーク型もまた到底わが陸軍の敵にあらざることが立證された、空中戦において我方一機破損されたが搭乗員は落下、傘降下により無事であった。

【東京廿七日】帝國陸軍航空部隊は二十五日朝蘭貢

來栖前大使記者團に語る

營業案内

ケロセンナフタ
特別大勉強

【東京廿六日】米國がハル公使が「私は問題の公文を受取文を以て日本に最後通牒を突きつけたときハルを訪問し右は間も我が帶を挑戦した日と経過せんとする前日、米橋大使は新開記者團と會見、「一九等かの了解成立に努力ありた四十一月廿六日は米國が太しと申入れたのであつた」と平洋半島維持に對する日本の日本側に誠意ありことを明善の努力を極みず傲慢不遜かにし、さらに

にも我が帶を挑戦した日と

して世界外交史上記録される

であらう」と聲明した。同大使は二年前のハル國務官との會談を想起して

私はハル公文を読み未だ嘗てない幻滅の悲感を感じた

右公文は右米間の會談を一

方的にまた不當にも切り

んとの最後通牒にはからならず、野村大使と私はこれを帝國政府に移牒することを遂達したほど我方に不利なとく一ズベルトの好戦的態度

而かも屈辱的な要求を含んでいたのであつた、そこで

私等は翌日ルースペルト大統領を訪問し右公文の再考あると強調され

慮を求めたが彼はあくまで

冷淡な態度を示しハルも

また私等の要求に耳を籍さず、同公文は本國の幕閣を

重ねて闡明したものである

と答へたのみであつた

と述べ、さらに來橋大使は

見てゐるが如き印象を米國民

の爲めに心配を抱いてゐる

るが如き印象を米國民

の爲めに心配を抱いてゐる

るが如き印象を米國民